

「日本語表現T2」必修化後3年にみる成績の推移と学修への取り組みについて

—医療貢献学科言語聴覚学専攻1年生の事例から—

杉 淵 洋 一
SUGIBUCHI Yôichi

1. はじめに

平成28年(2016年)度後期より、本学医療貢献学部健康医療科学部医療貢献学科言語聴覚学専攻1年生(初年次生)における「日本語表現T2」(応用科目)の授業が、「選択」科目から「必修」科目に変更された。本稿においては、必修後3年間(平成28年度、29年度、30年度)の受講学生の成績を多角的に分析することによって、成績にどのような変化や特徴がみられ、そこから予測される原因について考察を行いたい。¹⁾

2. 必修化後3年の単位取得率について

まず、必修科目となった平成28年後期以降の、当該専攻における「日本語表現T2」の単位取得率に目を投じてみたい。この3年間における「日本語表現T2」の単位取得率は、平成28年度:100%(履修者総数:48、単位修得者数:48)、29年度:98%(49、48)、30年度:96%(49、47)と、一見減少傾向にあるような印象を受けるが、(欠席6回以上による)失格者を除いた単位取得率は、28年度:100%、29年度:100%、30年度:100%と、この科目について単位を取得する意思を失わなかった受講生に関しては、この3年間にわたって100%を維持している。前期に設置されている全学必修の本科目の基礎科目として位置付けられる「日本語表現T1」における単位取得率も、28年度:98%(履修者総数:49、単位取得者数:48)、29年度:100%(49、49)、30年度:98%(49、48)、失格者を除いた単位取得率も3年間100%を維持しており、「T2」における単位取得率と同様の傾向を確認することができる。²⁾

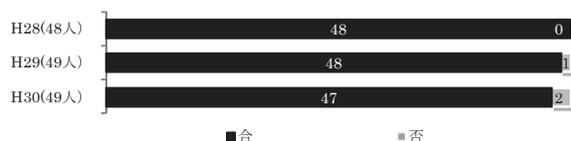


図1 言語聴覚専攻における「日本語表現T2」単位取得率

3. 必修化後3年の成績(評価)について

ここで、必修化後3年の当該専攻の受講後の成績について確認を行ってみたい。28年度の成績は、A+:18.8%(9名)、A:58.3%(30名)、18.8%(9名)、C:4.2%(2名)、失格:0、その他:0、29年度は、A+:12.2%(6名)、A:

49.0%(20名)、B:34.7%(17名)、C:2%(1名)、失格:2%(1名)、その他:0、30年度については、A+:16.3%(8名)、A:61.2%(30名)、B:18.4%(9名)、C:0、失格:4%(2名)、その他:0と推移してきている。³⁾この3年間の当該専攻の成績の変化から浮かび上がってくるものとして、28年度、30年度の成績と比べて、29年度の成績に落ち込みがみられることがあげられる。

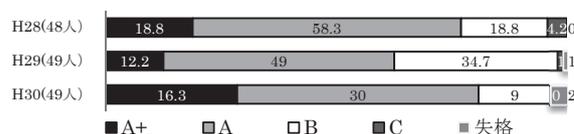


図2 「日本語表現T2」評価

4. 入学時学習力調査の結果との関係から

ここで、株式会社ベネッセキャリアが、本学の初年次生を対象にして入学時に実施している学習力調査の中の「国語・基礎学力」のテスト結果から算出される学生達の成績に目を転じたい。学生達の成績は、28年度(受験者総数:49名)は、A:8.2%(4名)、B:38.8%(10名)、C+:22.4%(11名)、C-:18.4%(9名)、D+:10.2%(5名)、D-:2.1%(1名)、29年度(49名)は、A:26.5%(13名)、B:30.6%(15名)、C+:18.4%(9名)、C-:20.4%(10名)、D+:4.2%(2名)、D-:0、30年度(49名)は、A:24.5%(12名)、B:38.8%(19名)、C+:18.4%(9名)、C-:14.3%(7名)、D+:4.2%(2名)、D-:0と評価されている。大学の授業を受講する際に求められるとされる能力を有するとされるA、Bの評価を受けている学生の割合は、28年度:47.0%、29年度:57.1%、30年度:67.3%と、この三年間で2割以上好転している。当該専攻の学生達の学習力については、この調査の結果を踏まえればという前提付きではあるが、低下傾向にあるとは言えず、初年次における必修の日本語表現科目である「T1」、「T2」の成績に落ち込みがみられることは反対の成績が記録されていることになる。この背反する調査結果は、当該学生達の学習態度、学習内容の性質の違い、採点方法の相違などを予想することが可能であるが、ここで紙幅を割いて論じるには大きすぎる問題であり、本稿での分析はここまで留めておきたい。

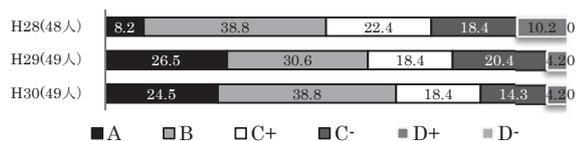


図3 学習力調査（国語・基礎学力）成績

5. 必修化後の3年の平均得点について

5.1 総合的な見地から

ここで、話を「T2」に戻し、当該学生が授業で獲得した点数の平均値を求めると、28年度：84.3点、29年度：80.7点、30年度：84.1点と、先に論じた成績の評価の分布と同様に、29年度の点数に、目に見える他年と比した際の落ち込みを確認することができる。

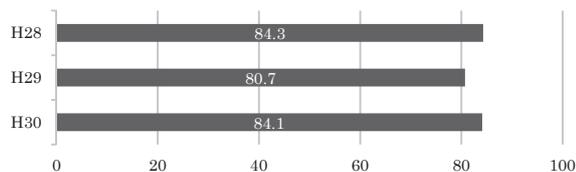


図4 「日本語表現T2」平均得点

ただし、この平均点を、ここ3年間の純粋な受講学生の実力差として判断することはできないところがある。何故ならば、「T2」には「T1」と同様に、授業を離れた場における日本語表現についての取り組みを評価する「学外学習（最大10点の加点）」というオプションな得点制度があり、29年度から30年度の間大幅な変更があり、「学外学習」を含めたスコアで平均点を算出すると、30年度の平均点が他の2年に比して明らかにアドバンテージのある点数になってしまうからである。この3年間における言語聴覚専攻の「T2」履修生の学外学習の総得点は、28年度：5点、29年度：20点、30年度：50点であり、30年度における得点の劇的な向上は、学外学習中の日本語検定委員会が主催する日本語検定試験の結果に伴う配点が、29年度までの2級以上認定：10点、準2級認定：5点、3級認定：0点であったものが、30年度は、2級以上認定：10点、準2級認定：8点、3級認定：5点に変更されたため、最も得点を加えることが容易な3級に当該の学生達の受験が殺到し、認定された結果といえるであろう。よって、先に述べた各年度の平均点より、学外学習の平均点を差し引いた数値が、より正確なバランスの取れた平均点ということになり、その数値は、28年度：84.2点、29年度：80.3点、30年度：83.1点であった。このことから、授業時間外の活動に与えられる得点を総合的な平均点から取り除いた値においても、3点から4点前後、平均点が28年度、30年度に比して29年度より下回っている、つまり、授業内における学習の総合点が不足していることが明らかである。

5.2 出席率の見地から

それでは、この28年度、30年度に比して、29年度の成績の評価、総合点が低いということの原因は、具体的には、「T2」における学習のどのような点に求めることができるのであろうか。授業内における評価の内訳（授業への参画：20点、小テスト：30点、提出課題：20点、グループ発表：20点、最終レポート：10点 合計：100点）の平均点等を考察することによって、その原因を分析、検討していきたい。

まずは出席率について目を向けてみたい。議論の対象となっている3年間における「T2」授業出席率は、28年度：97.7%、29年度：94.2%、30年度：97.9%と、若干29年度に落ち込みがみられるものの、何れの年度においても、15回の授業中において一人当たりの出席回数の平均は14回以上を越えており、ほぼ皆勤といっているような好ましい状態が継続していることを確認することができる。⁴⁾

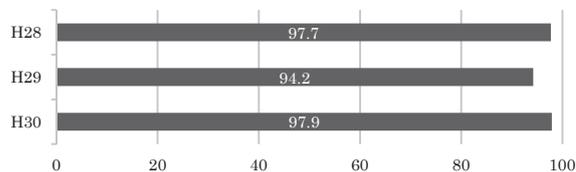


図5 「日本語表現T2」出席率

5.3 小テスト（30点）の見地から

続いて、授業開始時の5～10分を利用して実施される小テストについて分析を進めていきたい。分析対象となる3年間における小テストの成績（30点満点）は、28年度：25.9点（86.5%）、29年度：25.2点（83.9%）、30年度：24.0点（79.9%）と、二年連続して3～4点程度下降している。

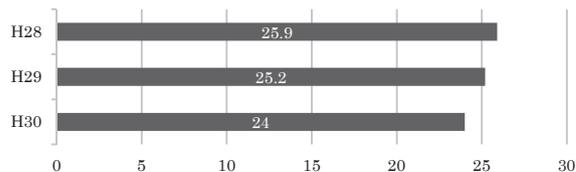


図6 「日本語表現T2」小テスト平均得点

この小テストの平均点の下落については、30年度よりテストの実施方法に変更が加えられたことが一因となっていることを推察することができる。29年度まで小テストは、第3回目の授業から第12回目の授業まで、連続10回にわたって実施され、一回のテストの配点は3点満点（3点×10回 合計：30点）であった。それが、平成30年度の「T2」授業からは、第3回目の授業から開始されることに変更はないが、隔週の実施となり、3回目、5回目、7回目、9回目、11回目、13回目の授業の冒頭で行われ、1回あたりの配点が、それまでの3点から5点（5点×6回 合計：30点）に変更された。それまでの10週連続して実施される場合には、履修学生達の意識

に、毎週小テストがあるということが刷り込まれやすいため、テストについての予習を行ってから授業に参画する率が高く、その分、テストにおける獲得点数も高くなっていたことが想像される。それに対して、30年度のように隔週で小テストが行われる場合には、テストの実施される週と実施されない週が交互にやってくるため、その週にテストが行われるか、行われぬかの確認、そして予習が疎かになってしまい、結果として小テストが毎週実施される場合よりも点数が低くなってしまっているのではないかと（あくまでも稿者による主観的な判断の域を越えることではないが、）推測することができる。

授業を運営していた者の実感として、授業開始時に学生達の一部が、その週に小テストが実施されるかどうか他の学受講学生に確認し、小テストが行われることを忘れていた場合、それから慌てふためいて教科書のテスト範囲の例題について掲載されている頁を開いていることを数回目にしていたことから、小テストの毎週から隔週への実施の変更は、テストに対する取り組み、その結果としての獲得点数の低下を招く一因となっていることを想像することができる。そのため、「T2」同様に、30年度から毎週（全10回）の実施から隔週（全6回）の実施に変更された初年次前期の必修科目である「T1」における小テストの同専攻の平均点（30点満点）も、28年度：26.3点（87.6%）、29年度：25.3点（84.2%）、30年度：25.0点（83.3%）と下降していることは、30年度と同専攻の学生の学習能力が28年度、30年度の学生達の学習能力よりも劣っているというよりは、小テストの実施方法の変更によるところが大きいと考えるのが自然であるだろう。

5.4 プレゼンテーション（20点）の見地から

「T2」授業の根幹をなすといっても過言ではない、プレゼンテーション（口頭発表）（中間報告書：5点、プレゼンテーション（15分）：10点、プレゼン後の質疑応答：5点 合計20点）における3年間の平均点に注目してみたい。プレゼンテーションについての平均点は、28年度：16.6点（83.2%）、29年度：16.3点（81.5%）、30年度：16.1点（80.6%）と推移している。最大値から最小値まで0.5点（2.6%）という差はあるものの、決して大きな差があるといった数値ではなく、この3年に関する対象専攻のプレゼンテーションにおける獲得点数は、同程度で推移していると判断することができる。

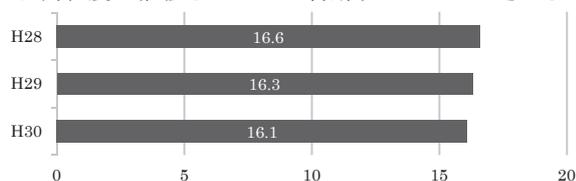


図7 「日本語表現T2」プレゼンテーション平均得点

5.5 提出課題（20点）の見地から

次に、授業内で取り組む提出課題（28年度、29年度：4枚×5点 合計20点、30年度：5枚×4点 合計20点）の平均点について見ていきたい。この3年度における平均点は、28年度：16.7点（83.7%）、29年度：15.9点（79.4%）、30年度：17.9点（89.4%）と推移しており、30年度が最も高いのに対して、29年度が最も低く、平均点としては2点（10%）の差が確認され、29年度に関しては、28年度よりも、際立った開きがみられるという程ではないが、0.8点（4.3%）程出来が悪く、他の年度に比して、授業への取り組みに対する甘さのようなものが全体的にあったのではないだろうかということを考えさせられる材料となりえるであろう。

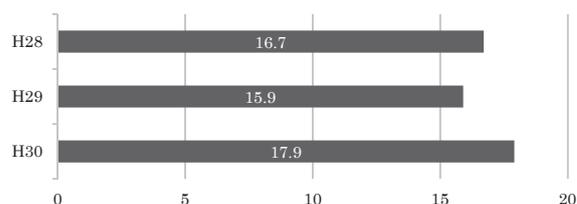


図8 「日本語表現T2」提出課題（20点満点）

5.6 最終レポート（10点）の見地から

評価の内訳の最後の一つとなる最終レポートの平均点は、29年度の当該の専攻学生における成績の落ち込みを考えるうえで、その原因を考察するための大きな材料となるものである。第15回目の授業で提出することになっているグループで行ったプレゼンテーションを個人が4000字程度の文章にまとめる最終レポート（10点満点）の平均点は、28年度：5.3点、29年度：4.1点、30年度：5.5点と、28年度、30年度に関してはほぼ同一の点数を記録しているにもかかわらず、29年度の点数には、それらの2年よりも平均点として1点以上劣っていることを知ることができる。

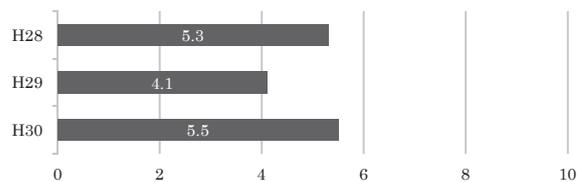


図9 「日本語表現T2」最終レポート平均得点（10点満点）

この29年度における成績の減退の要因を考える材料として、この最終レポートの（単位取得者中の）提出率をあげることができるであろう。最終レポートの提出率は、28年度（単位取得者：48名）：97.9%（47名）、29年度（48名）：75.5%（37名）、30年度（47名）：93.6%（45名）、未提出者の数に関しては、28年度：1名、29年度：11名、30年度：2名と、28年度、30年度と同専攻の学生達が、ほぼ100%の値で最終レポートを提出しているのにも関わらず、29年度の学生は、ほぼ4人に3人程度しか提出していない。

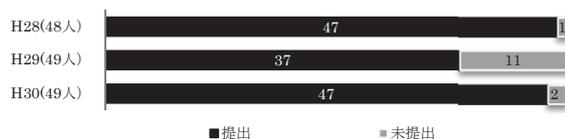


図10 「日本語表現T2」最終レポート提出状況(単位取得者)

ここで、「T2」の最終レポートを提出しなかった当該専攻の学生の成績を除いた、つまり最終レポートを提出した者のみの、この3年間についての最終レポートの平均点を算出してみたい。未提出者を除いた最終レポートの平均点は、28年度(47名):5.4点、29年度(37名):5.3点、30年度(45名):5.9点と、30年度の成績が若干高いものの、28年度と29年度の差異は、たった0.1点しか見られず、この数値差でどちらが上か下かといったようなことを明言することはできない。

つまり、同専攻における29年度の「T2」の成績の落ち込みは、最終レポートの未提出者が散見されたことが大きな要因となっており、調査対象となる学生達の学力の低下と考える要素は少ないものと言えるだろう。

6. 総括と今後の課題

本学言語聴覚学専攻1年生における「日本語表現T2」授業必修化後3年(平成28年度、29年度、30年度)の成績について、ここまでに行ってきた分析とその分析結果についての考察より、授業で獲得することのできる100点の点数の内の10点に相当する最終レポートの提出率の良し悪しによって大きく左右されることが明らかとなった。逆の言い方をすれば、学生達が最終レポートをしっかりと提出していれば、この同専攻の3つの学年における成績に大きな差はみられないと言うこともできる。

29年度の学生達の平均的な成績が、28年度、30年度の学達と比べて劣っていることは、上述の通り最終レポートの未提出が決定的な要因となっていることは明らかになったが、未提出の原因については、本稿を執筆する段階においては解明することができておらず、さらに子細な調査、分析を要するであろう。あえて、その原因について推測とするならば、(高い成績は必要ないといったような)その学年の学生達の気質や雰囲気、他の授業で課される学習時間外に行わなければならない課題等との兼ね合いなどに左右されるところが大きいのではないだろうか。また、最終的な「T2」授業の点数が、最終レポートの提出の前に単位認定となる60点を超過していることを学生自身が把握していれば、単位を修得するという意味においては、より高い成績を望む動機がない場合、絶対的な必要性のない最終レポートの提出を控えてしまうのではないだろうか。

現状としては、最終レポートを中心とする提出物を学

生達に確実に提出させることができれば、必修化一年目(平成28年度)の成績を維持することは可能であり、この傾向を維持していくためには、授業を担当する教員がどれだけ上手く配慮して学生達に最終レポートを提出させるかが鍵となってくるであろう。

また、毎週から隔週の実施などの理由で、小テストの平均点が落ちてきているように思われるが、30年度と同専攻の学生達は、提出物の点数によってその点を挽回しているような点数の獲得の仕方をしているため、小テストの実施の仕方を工夫すれば、現在よりも点数が向上していくことが期待される。ただし、単位を取得するのみであるならば、最終レポートは未提出であってもよいという雰囲気が学生達の間形成されてしまうと、それに連動して、他の取り組みへも悪影響を与えることになり、全体的な成績を相乗的に押し下げていく危険性もあるため、その点については注意が必要である。

注

- より厳密を期すならば、「日本語表現T2」必修化以前(平成27年度以前の選択科目時代)の成績、評価等についても目を配らなければならないであろうが、同科目を履修していた学生の数が限られている上に、複数の教員が同専攻の学生の授業を担当しており、特徴や傾向を判断するには材料が乏しいため、本稿では必修化後3年(平成28年度、29年度、30年度)のデータのみを扱った。
- 本稿の目的は、当該専攻の必修化後3年の「日本語表現T2」の成績について分析することであり、「日本語表現T1」の成績等については参考、補足的な資料として紹介するに留め、成績そのものについての詳細な分析は差し控えている。
- この3年間における「T1」の成績については、28年度、A+:0、A:42.9%(21名)、44.9%(22名)、C:10.2%(5名)、失格:2%(1名)、その他:0、29年度は、A+:2.0%(1名)、A:32.7%(16名)、B:46.9%(23名)、C:18.4%(9名)、失格:0、その他:0、30年度については、A+:0、A:30.6%(15名)、B:46.9%(23名)、C:20.4%(10名)、失格:2%(1名)、その他:0と推移している。成績を100点満点にして平均値を求めると、28年度:77.4点、29年度:75.4点、30年度:74.5点と、連続して成績が後退していることを認めることができ、この点については本稿とは別のところで改善策を考慮する必要があるであろう。
- 同専攻における「T1」出席率は、28年度:98.8%、29年度:97.6%、30年度:97.9%と、「T2」とほぼ同一の高い数値を維持していることから、授業へ出席することについては、たいへん高い意識を持っていることをうかがうことができる。